ポケットモンスター白と黒の竜

コーエン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター白と黒の竜

【Ｎコード】
Ｎ７３８５Ｗ

【作者名】
コーエン

【あらすじ】
英雄の神話が残るイッシュ地方で、十二歳の少年達が旅立つ。
冒険の果てに少年達は何を得るのだろうーーー

第一話　クウトとショウ（プロローグ）（前書き）

第一話です。
拙い文章ですがよろしくお願いします。

第一話　クウトとショウ〈プロローグ〉

瞼の裏の暗闇には、風の吹く音だけ聞こえる。そんな中で寝転がっていた少年、クウトは足音を聞き、面倒くさそうに体を起こした。音のした方を見ると、白み始める空の中に一人の少年が走ってくるのが見える。

少年がクウトの隣に着いたところで、クウトは少年に声をかけた。

「何しに来たの？ショウ」

微笑しながら言っているが、実際は気持ちよく寝転んでいたところをなに邪魔しにきたんだと思っているのだろう。

証拠に目が笑ってない。

そんなことを考えながらショウと呼ばれた少年はクウトの隣に座った。

「いやぁ、朝起きたらお前がいないから探してたんだよ。やっぱここにいたか」

「ほっといてまた寝ても良かったのに」

（それで遅刻すればよかったのに）

クウトはこう思ったがそれはバレたようで、「おいコラ。今、何か変なこと考えただろ」と言ってきた

。

（流石親友。お見通しか）

内心そう思いながらショウの言葉を軽く笑ってスルーしつつ、ク

ウトは自分の腰のホルダーを見る。
そこには一つのボールがあった。今は中にポケモンは入っていない。
この世界では、十歳になる年に自分のポケモンを持って良い事になっている。
そしてそこから二年間、小等学校(しょうとうがっこう)に通いポケモンについての基礎知識と、最低限必要な教育を受けることが義務づけられていた。
クウトとショウは共に小等学校の二年生にして、明後日小等学校を卒業する学生だ。

「で、何でクウトはこんな朝っぱらから出かけてるわけだ?」

「今日の大会の本戦で使う戦略についての頭の整理。主に練っているのは隣で座ってるバカの対策」

「誰がバカだ!」

「テストで万年0点のショウの他に誰がいるんだい?」

「うっ・・・。痛いところを・・・」

「まったく。バトルは強いのにそれ以外になると全然できないんだから・・・。」

呆れてそう言いながらクウトはここ、カラクサタウンの中心にある競技場を見た。
カラクサタウンでは年に一回、ポケモンバトルの大会を開いている。
方式はまずブロックごとに分かれ総当たり戦で行い、各ブロックごとの一位通過者でトーナメント戦を行い、優勝者を決めるのだ。それぞれ総当たり戦は予選。トーナメント戦は本戦と呼ばれている。

さらに、この大会には実習訓練として、小等学校の二年生も全員参加することになっている。
だが、大会にはバトルに慣れている一般の参加者が多い。
大会で一般の参加者と当たった場合、経験の差から勝つことはかなり難しいのだ。
たまたま勝てたとしても、五、六人で一組のブロックの中に一般の参加者は何人もいる。
その中で勝ち抜くのはかなり難しい。毎年ほとんどの生徒は予選で敗退する。
たまに予選を勝ち抜いて、本戦に進む生徒もいるが、予選を勝ち進んだ者の前に敗北し、未だに二回戦を突破した生徒はいない。
・・・去年までは。
今年の生徒はひと味違った。
準決勝に勝ち上がった選手四人の内、三人が小等学校の生徒なのだ。
かつて無い快挙である。この影響でクウト達はスーパールーキーズとあだ名がついたほどだ。

（だからといってどうこうする訳でもないし・・・。それにまだまだ未熟だ）

今回の大会でここまで行けたのも相手が子供だと油断してくれたからだ。決して自分の実力ではない。

・・・と、クウトは思っているが、実際はほとんどの相手は油断していなかった。
つまり、クウトは実力でここまで勝ち進んで来たのだ。

「じゃあ、俺は帰って朝飯食うぜ。クウトはどうすんだ？」

物思いにふけってたクウトはショウの声で我に返った。

「いやいや。この時間まだ食堂開いてないから。整理はついたし僕も戻るよ」

「じゃあ競争な！」

そう言ってショウは走り出した。

「何でそうなんだよ！」

クウトも後を追う。

ちょうど昇りだした太陽が駆けていく二人を明るく照らしていた。

第一話　クウトとショウ〔プロローグ〕（後書き）

クウト「汚い文章・・・。」

記念すべき後書きでの第一声がそれか！！

ショウ「だって汚ねぇもんは汚ねぇし。」

クウト「そもそもポケモンの小説なのにポケモンが出てきてないってどういう事？」

次からは出すって！・・・多分。

クウト「何か言った？」

いや、何でもありません！

文章力がなるべく早く付くように努力していきたいと思います。

感想・アドバイスをいただけたら大変嬉しいです。

第二話　ありふれた毎日〔ニチジョウ〕

ここは、小等学校に備わっている食堂。生徒ならば誰でも無料で食事を食べられる場所だ。
未来を担う子供達のためにと、寮と共にどこの小等学校にも必ずある施設の一つだ。資金は全額ポケモン協会から出ている。
今の時間は朝食を食べに来た生徒で賑わっている。
そんな食堂の一角でクウトが呆れたように言った。

「なんでそんなに食べれるわけ？」

クウトの隣には皿がタワーのように積み重なっている。いや、現在進行形で増えている。
原因はクウトの言葉も聞かず、まるでブラックホールのように食べ続けているショウだ。
周囲の生徒は日常茶飯事だとでも言うように見向きもしない人もいれば、異常な光景に呆然としている人もいる。

（こんなに食べて良くお腹壊さないなぁ・・・）

そんなことを思いながらクウトは声をかけた。

「食べ過ぎてお腹壊して大会に出れなくなっても知らないよ」

「・・・・・・」

やっぱり聞こえていない。さっきからずっとこの調子だ。いつものことだと思っても待たされるクウトは面白くない。
そんな状態のクウトの視界に赤い液体の入ったビンが入ったのは

ショウにとって不幸だった。
クウトはそれの蓋を開け、次々に運ばれてくるご飯（食堂のおばちゃんが次々と盛り、それを食堂の職員が運んできている。）の上に躊躇無くかけた。
赤い液体をかけられた白米はみるみるうちに赤くなっていき、最終的にほぼすべての米粒が赤くなった。ショウは食べるのに集中して気づいてない。
悪戯を成功したクウトは笑顔で食堂から出て行った。

その後ーーー

「ん？このご飯なんか赤いぞ？ま、いいか」

真っ赤なご飯を口に運ぶショウ。
瞬間。

「ぎゃあぁぁぁぁ！！何だこれ！！辛れぇ！！！！」

絶叫しながら食堂を走り回った。
今日も平和だ。

何事もなく部屋に戻り、ベットに潜り込んだ。
そう思えたらどれだけ嬉しいだろう。

クウトは寮の自室で頭をさすりながら思っていた。クウトの頭には一つ大きなたんこぶがあり、目の前にはそれを作った張本人。ふさふさな、クウトの目の色と同じ茶色の毛を持つポケモン・・・学名、イーブイがいた。そのイーブイは反省の色などおくびも出さず、ポケモンフーズを食べている。

ーーーー数十分前ーーーー

クウトは自室のドアを開け、何事も無く部屋へ入る筈だった・・・。そう筈だったのだ。

開けた瞬間にクウトの腹に飛び込んできた。否、突進してきたイーブイに吹き飛ばされ、ドアの先にある壁に頭から突っ込み激突と共に意識を手放した。

目覚めたのは保健室のベット。

（最悪だ・・・）

「ブイブ～イ」

いつの間にかポケモンフーズを食べ終えたイーブイが「なんでそんな顔してるの？」とでも言うように見ていた。顔に出ていたらしい。

（君のせいだよっ！！）

反省のかけらもない相棒に内心で毒づきながら、ふと時計を見上げる。

（９時４５分かぁ・・・）

大会は１０時から。開催場所のスタジアムまでは２５分くらいかかる。

つまりーーーー

「遅刻だぁぁ！！」

大音量で叫んだその言葉は、誰もいない寮内によく響いた。

「やばい！行くよイブ！！」

「ブイ！」

応えるように鳴いた相棒と共に、クウトは誰もいない廊下を駆けていった。

第二話　ありふれた毎日〔ニチジョウ〕（後書き）

補足：小等学校の寮は申請すれば無料で入れます。

第三話　八百長〔ヤオチョウ〕

全力で走ったクウトだったが結局大会には間に合わなかった。幸い保健室の先生が事情を説明してくれていたため失格にはならずに済み、大会は遅れて１１：００からとなった。

今はその合間の時間だ。

「何の用？用事がないんだったらどいてほしいんだけど」

クウトが珍しく辛辣（しんらつ）な言葉を目の前の少女に浴びせた。

周囲にはクウトと肩の上にいるイブ、目の前の少女だけしかいない。

（いや、誰もいないタイミングを狙ったんだろう）

となれば、これからの話の内容も見当が付く。

「次の試合。貴方、私にわざと負けなさい。報酬は弾むわよ？」

つまり、クウトと年がほとんど変わらなさそうなこの少女は八百長に応じろと言っているのだ。

右手に握られている金はその報酬だろう。

予想通りの言葉にクウトは溜息（ためいき）をついた。

目の前の少女、ランは小等学校の生徒が上位のほとんどを占める中で唯一残っている一般参加の出場者で、準決勝でのクウトの対戦相手だ。

準決勝まで勝ち進んできた相手なので、それなりに強いのだとクウトは思っていた。

・・・八百長を持ちかけられるまでは。

（情けない・・・）

真っ向から勝負しないのがクウトは気に入らなかった。
イブも同じ気持ちらしい。視線を向けると苦笑いを返してきた。

「金を使って勝って嬉しいの？いや、金を使わないと勝てないの？」

哀れみの目を向けながらクウトが言ったその言葉にランは顔を真っ赤にして怒った。
殴ってきそうな勢いだ。

「何ですって！！あんたとそこのイーブイごときに私が負けるとでも」

「いい加減にしようか・・・」

さっきまでの声とは違う、怒りのこもったクウトの声がランの言葉を遮（さえぎ）った。
自分だけならまだ良い。だが、イブまで侮辱（ぶじょく）されるのは許せなかった。

「イブは関係ないだろ！そんなに勝ちたいんだったら実力で勝って見せろ！！」

怒りを込めた言葉をランに言い放った。交渉決裂。

「後悔するわよ！」

ランは捨て台詞を残して逃げるように去っていった。
辺りは嵐が去った後のように静けさが戻ってきた。

「イブ」

いきなりかけられた声にビックリした。
これほどまでに怒ったクウトは久しぶりに見た気がする。

「そろそろ準決勝だ」

さっきまで怒っていたとは思えない普段通りの声。

しかし・・・

「行くよ」

目は笑ってなかった。

第四話　準決勝（セミファイナル）（前書き）

今回の前半部分はクウトの一人称です。
けっこう読みづらくなっています。スミマセン、スミマセ（ｒｙ
そして初めてのバトル描写！
なのに短い・・・。
自分の文才の無さに泣けてくる今回でした・・・

第四話　準決勝〔セミファイナル〕

〔side　クウト〕

バトルフィールドを挟んで僕とランが対峙している。

「さっきはよく言ってくれたわね」

「何を？」

「何ですって！」

顔を真っ赤にして怒るラン。

人目が無ければ殴ってきそうだ。

だが、僕は間違った事を言ったつもりはない。

・・・さて。

僕はランの観察を始めた。

対戦前からでも相手がどういう動きをしてくるか読めることがある。

そして今回みたいに血気にはやっている相手はガンガン攻撃してくる可能性が高い。

それに対し有効なのは、出鼻を挫(くじ)くことだ。

初手で相手の攻撃の勢いを挫くことで、その後の試合展開を有利に運べる。

「イブ」

声と同時に肩の上に乗っていたイブが飛び出した。

「行きなさい！コジョフー！」

対してランが繰り出したのはコジョフー。
素早い動きで近接攻撃を得意とする格闘タイプのポケモン。見るのは初めてだ。
・・・げ、相性不利だし。
ま、そこを何とかするのがトレーナーの仕事だよね。

審判がジャッジ用の旗を上げた。すなわちバトル開始はすぐということだ。
あれが下ろされると同時にバトルが始まる。

フィールドを覆っている砂が少し舞った。

さて・・・

【始め！！】

行きますか！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

先に動いたのはランだった。

「コジョフー！‘はたく’！」

指示と共にイブに向けてまっすぐ走り出す。

クウトの計算通りの動きだ。
そして、直線的な動きほど避(よ)けるのは容易だ。
「ギリギリまで引きつけてから‘でんこうせっか’で回避。そのままコジョフーの後ろに回り込め」
ギリギリまでコジョフーを引きつけ、今まさに‘はたく’を繰り出そうかというタイミングで光の如(ごと)く速さで‘はたく’を回避。
そのままコジョフーの背面に回り込み・・・。
「‘たいあたり’」
背面からコジョフーに‘たいあたり’。
コジョフーは背後からの攻撃を回避できず、数メートル吹っ飛ばされ、受け身を取った。
負けじとランも指示を出す。
「‘ローキック’！」
数メートルあった距離を素早い動きであっという間に詰め、イブに向かって‘ローキック’を繰り出す。
技はイブの前足に当たり、イブの体勢を崩す。
はずだった。
「！？」
‘ローキック’はイブの前足をすり抜けた。
‘かげぶんしん’で、できた偽物だったのだ。
‘ローキック’で蹴り抜いた偽物は即座に消える。

だが、イブの姿は目の前にあった。
本体は‘ローキック’が当たらず、なおかつ分身へ攻撃して攻撃を空振ったコジョフーをすぐに攻撃できる分身から半歩だけ下がった場所にいたのだ。

（今だ！）

コジョフーが技を空振った隙をクウトは逃さない。

「‘おんがえし’！」

一瞬イブの体が光り、眼前のコジョフーに体当たりをかました。
至近距離からの攻撃に、攻撃後の隙も相(あい)まって、‘おんがえし’を避けれなかったコジョフーは、ランの足下まで勢いよく飛んで行き、うつぶせに倒れた。

「‘めざめるパワー’」

イブの周りをいくつもの紫の球体が囲んだ。
この技はポケモンによってタイプと威力の変わる特殊な技で、イブの場合はゴーストタイプになる。
イブは倒れているコジョフーに向けて‘めざめるパワー’を撃った。

「‘みきり’！」

ランの指示ですぐさま起き上がり動体視力を強化し回避する技、‘みきり’で飛んでくる紫の球体を次々と躱(かわ)していく。
コジョフーに当たらなかった‘めざめるパワー’は次々とフィールドに激突し砂煙を起こしていく。
やがて、コジョフーの周囲は砂煙で視界が利かなくなった。

だから気づかなかった。
既にイブが‘でんこうせっか’で背後に回り込んでいることを。

「！」

気づいたときにはもう遅い。
イブの‘おんがえし’がコジョフーの背中に当たった。
そしてこの瞬間勝敗も決した。
コジョフーの戦闘不能を告げる審判の旗が上がった。

第五話　準決勝　ｓｉｄｅショウ（レッカノゴトク）（前書き）

ショウの準決勝です。

第五話　準決勝　ｓｉｄｅショウ〔レッカノゴトク〕

「相変(あいか)わらず怒ったときのあいつはおっかねえ」

全く変わってない。
選手控え室に備(そな)わっているテレビでクウトが出ている準決勝を見ていた。
ショウの側には、ガーディ・・・ショウの相棒、ディンが寝転がっている。
その他に控え室に人の姿はない。
昨日の時点でここに選手として入れるのは４人のみ。
そのうち２人はバトル中、残りの１人はスタジアムの反対側にある控え室にいるはずだ。

なんて事を考えている内にバトルが終わった。
コジョフーの戦闘不能が宣告されている。
クウトの勝ちだ。バトルが始まってから２分経ってない。
イスから立ち上がったショウに係員の声が掛かった。

「準決勝第二試合出場のショウ選手。フィールドへお願いします」

手を挙げて了解の意を示しフィールドへ歩いて行く。
ちょうど、フィールドから戻ってくるクウトと会った。

「よ、決勝進出おめでとさん」

「決勝で待ってるよ」

それだけ言ってクウトは歩いて行ってしまった。

（決勝で待ってる、か）

当然だ。クウトを倒すまで負けるつもりはない。

改めて決心し、ショウはフィールドに飛び出していった。

準決勝の相手が出したのはハーデリア。

ヨーテリーの進化形で、イッシュ地方で広範囲に生息しているポケモンだ。

一進化のポケモンで、ディンの弱点を突ける‘なみのり’や‘がんせきふうじ’などを覚えられるので

相性はディン不利といったところか。

だが、そんな者は関係ない。

そう言わんばかりにバトルが始まると同時にショウは動いた。

「‘かえんぐるま’！」

炎の車と化したディンがハーデリアに突っ込み、上空に打ち上げる。

「‘アイアンテール’！」

追撃。

落ちてきたハーデリアに鋼鉄の如く硬化した尻尾をたたき込む。
‘アイアンテール’が直撃したハーデリアはフィールドの端まで吹き飛ばされた。

さすがにこのままではまずいと思ったのか相手のトレーナーが慌てて指示を出した。

「‘がんせきふうじ’！」

ディンの頭上から大きな岩が降り注ぎ、ディンの姿が見えなくなった。
だが、ショウは動じない。この程度、ディンは指示なしで躱(かわ)せる。
そう分かってるし、信じている。

ハーデリアの後ろの地面が盛り上がった。

（やっぱし頼りになるぜ！）

「ディン！」

ショウの声と共にディンが地面から飛び出す。
ハーデリアの後ろを取った。さらに不意を突かれてとっさに反応できない。

「決めるぜ！‘かえんぐるま’！！」

炎の車がハーデリアに直撃した。
ハーデリアの残りの体力を奪うのには十分な威力だった。
審判から戦闘不能のコールが宣告される。と、ともにショウは時計を見てガッツポーズをした。

試合時間1分2秒。
準決勝でクウトの作った今大会の最速記録を更新した瞬間だった。

第五話　準決勝　ｓｉｄｅショウ（レッカノゴトク）（後書き）

クウト
「あ、ショウ勝った」

しかも最速記録も抜かれたねぇ。

クウト
「いや、そもそもあれが最速記録だったのを知らなかったんだけど」

さて、次回は決勝です。
勝つのはクウトか、それともショウか！

クウト
「でももうできてるんでしょ。勝ったのはたしk」←強制終了

主人公がネタバレすんな（汗）

第六話　好敵手（ライバル）（前書き）

いろいろ修正してたら遅くなりました。

第六話　好敵手〔ライバル〕

小さいスタジアムはほぼ満席となっており、観客は決勝を今か今かと待ちわびていた。
そのフィールドの中に少年が2人立っている。クウトとショウだ。
だが、クウトは観客を意識からシャットアウトし、ショウに勝つための作戦を考えていた。
ショウのバトルスタイルは攻撃は最大の防御を信条にガンガン攻撃するスタイルだ。それを体現するように決勝までほとんど攻撃技しか使っていない。
半面、ショウは補助系の技を織りまぜてバトルするのは苦手だ。
それでもここまで勝ち進んで来れたのは攻撃の指示を出すタイミングが臨機応変かつ、的確だからだ。
だが、ショウには短所もある。
なかなか倒せない相手や逃げ回る相手だと苛立って大技を出してくるのだ。
そもそも大技とは体が成長した進化後のポケモンが使うような技だ。当然、進化前のポケモンが大技を使おうとすると使った後の隙も大きいし、体への負担も大きい。その隙を突けば勝てないこともない。
だが、そういう隙を突けなかった場合、自分がショウに勝つのは難しいとクウトは思っていた。
善戦はできるだろう。だが、勝つとなると話は別だ。

（実力が足りない）

イブも、自分自身も。同じ学校で同じ時間を過ごして、同じくらい努力をしてきたショウに真っ向勝負では勝てないほど差をつけられた。それが悔しかった。

「おい。クウト！始めんぞ！」

「！　ああ、ゴメン。始めようか」

ショウの声で我に返った。
いつのまにか審判も出てきている。どうやら自分待ちだったらしい。
あわててイブの入ったボールを構えた。クウトの動きを見てショウも腰のホルダーからボールを一つ取り出す。
それを確認した審判が上げていたフラッグを勢いよく下げ・・・

「始め！！」

審判の声が響いた。同時に2人もモンスターボールを投げた。

「行けっ！イブ！」

「行くぜ！ディン！」

クウトのボールからはイーブイ。ショウのボールからはガーディが勢いよく飛び出した。
ボールの中で既に指示を受けていたのだろう。ディンは着地と同時にイブに向けて接近し、‘かみつく’を繰り出した。

（最初から仕掛けてきたか！）

ショウが策もなしにこんな単調な攻撃をしてくるはずがない。

「‘でんこうせっか’で回避。そのままディンに接近しろ！」

‘でんこうせっか’を使ってディンの‘かみつく’を素早く回避

し、そのスピードのままディンとの距離を詰める。
無論、ショウがやすやすと接近を許す筈もない。

「‘かえんぐるま’！」

ディンに接近するイブに向けて、火の車と化したディンが突っ込んでいく。このまま‘でんこうせっか’と‘かえんぐるま’が激突すると技の威力の差でイブが力負けする。そう判断したクウトは激突を避けるために指示を出した。

「イブ！‘まもる’！‘かえんぐるま’の勢いを利用して距離を取れ！」

すぐさま‘でんこうせっか’を解く。一瞬後、‘まもる’の膜がイブを包み‘かえんぐるま’を完全に防ぎきった。さらに、ディンの‘かえんぐるま’の勢いを利用し、ディンと数メートル距離を離した。

（そう簡単にやらせてもらえないか・・・）

クウトは苦い顔をした。序盤になるべくディンの体力を削っておきたかったが、やはりそう上手くはいかないらしい。

「‘ひのこ’連発だ！」

人の頭一つ分くらいの火球が何発もイブに向かっていく。クウトから見て、それはさながら雨のようだった。だが、クウトは慌てない。あちこち攻撃範囲に穴がある。

「右斜め前に‘でんこうせっか’！次、左！次は右！飛べ！」

飛んでくる‘ひのこ’を高速で次々と躱していき、そのスピードのままディンに肉薄した。
ふと、クウトの視界にショウが入った。笑っている。
いくら何でも余裕がありすぎる。その余裕な態度にクウトは不安を覚えた。
もう一度フィールドをよく見ている。
攻撃態勢に入っているイブは無防備だ。つまりショウが狙っているのは・・・。

「まずい！イブ、‘まもる’だ！！」

クウトは慌ててイブに指示を出した。だが、既に攻撃態勢に入っているイブの体は止まらない。

「甘いぜクウト！ディン、‘アイアンテール’！」

ディンの尻尾が硬化し、イブをなぎ払った。至近距離からの一撃を避けられるはずもなくイブの体は宙を舞った。
ショウはさらに追撃する。

「‘かえんぐるま’！」

三度火の車と化したディンが、空中から落ちてくるイブめがけて突っ込んだ。
空中では躱しようもない。ディンの‘かえんぐるま’を喰らったイブは数メートル吹っ飛ばされた。

（‘ひのこ’は囮でこっちから攻撃を仕掛けされることが目的だったのか・・・。）

つまり、クウト達はおびき出されたのだ。完全にクウトのミスだ。今の攻防でイブの体力はかなり削れた。対して、ディンは今だノーダメージ。

‘おんがえし’を当てれば同じくらいまで持っていけるだろうが、ショウもそれは承知しているだろう。

だがら‘おんがえし’を警戒してる筈だ。そうなると、むやみに‘おんがえし’は使えない。

では、他の技は？

ーーーこれも駄目だ。どれも威力に欠ける。今のイブに小技でちまちま体力を削る余裕は無い。逆転の切り札となる‘おんがえし’を使えないのが痛かった。

（だけど、まだ負けてない！）

一つだけ残している、まだショウに見せてないもう一つの切り札。それを使えば逆転は可能だ。

だが、使うタイミングを間違えると確実に負ける。そしてその切り札で勝ちきれないと、次からは警戒されて切り札の意味をなさなくなる。そうなるとクウトに勝ち目はほぼ無い。必然的に一発勝負になる。

「‘かえんぐるま’！」

ショウの指示が聞こえた。これで勝負を決める気だ。

（好機が来るまでひたすら耐える！）

「‘まもる’だ！」

イブを包んだ緑の膜と火の車がぶつかり合う。

結果、ディンが押し返される形になり、両者の距離は7メートルほど開いた。

「もういっちょ、かえんぐるま、だ！」

「何度来ようが同じだ！イブ、かげぶんしん、！距離を取れ！」

再び迫る、かえんぐるま、は偽物のイブを貫き、本物はその隙に距離を取った。
ショウにこっちが逃げていると思わせることが大事なのだ。

（くそッ！クウトの奴逃げてやがる！）

案の定、すぐにショウはクウトが逃げていると思い込んだ。
そうなると、ショウがする指示は決まっている。大技だ。

「だったらこの技で終わりにしてやるよ！！」

声と同時にディンの周りの空間がゆがんだ。ディンの周りの気温が上がって陽炎ができているのだ。
陽炎ができるほどの大技はディンには一つしかない。

（、ねっぷう、か！）

クウトの狙い通り。このバトル中ショウが初めて見せた隙だった。
切り札を切るのは今しかない。

「なるべくディンまで近づけ！」

意味の分からない指示にイブは一瞬戸惑うも、今にも、ねっぷう

’を打とうとしているディンに走っていった。

「喰らえ！‘ねっぷう’」

ディンの体から、炎の風が生まれ、フィールド全体を紅蓮の風が駆け抜ける。フィールド全体を攻撃するため、逃げ場がない。ましてや、ディンに向かって走っているイブには攻撃は早く到達した。

これもクウトの計算の内、攻撃範囲が広いということは、逆に言えば攻撃し終わるまで動けないという事だ。ならば、攻撃が終わるまでに近づければ、好機となる。

「イブ！‘こらえる’」

‘ねっぷう’が今まさに当たろうかというタイミングでの‘こらえる’。

‘ねっぷう’はイブの残りの体力を削るのに十分過ぎたが、‘こらえる’の技の効果でギリギリ耐える。

そのイブの目前にはまだ‘ねっぷう’を発動中のディンの姿が見える。ショウが慌てるがもう遅い。

「喰らえ！‘じたばた’！」

「‘かえんぐるま’で迎え撃て！！」

ちょうど‘ねっぷう’の発動が終わったディンに慌ててショウが指示を出した。

だが、既にイブは‘じたばた’を繰り出している。

一瞬後、大量の砂塵がフィールドを舞ったーーー。

第六話　好敵手（ライバル）（後書き）

ショウ

「結局勝敗分かんないじゃねえか！」

ああ、そうだね・・・。

ショウ

「あれ？何か元気ないような・・・」

クウト

「ショウ、ほっといてあげて。作者この話7回書き直したらしいから」

ショウ

「マジかよ・・・。」

第七話　定まらぬ道〔マヨイ〕

「ハア・・・」

「ん？どうしたクウト？」

「いや、何でもない」

「そうか」と言うとショウはさっさと行ってしまった。
クウトはハア、と心の中でもう一度溜息をはき、今日の決勝を思い返していた。

「喰らえ！‘じたばた‘！」

「‘かえんぐるま’で迎え撃て！！」

技と技がぶつかり合い、生まれたエネルギーの余波でフィールドを大量の砂塵が舞う。

「イブ！」

「ディン！」

クウトとショウがそれぞれの相棒の名を呼ぶ。
やがて、砂塵が晴れ、立っていたのはーーー
ディンだった。

と、言うわけでクウトの脳内では反省会の最中である。
道を歩きながらぶつくさ言っているクウトは他人から見て変な人にしか見えない。

（えっと、あの場面は‘でんこうせっか’を使うべきで・・・）

「腹減った〜！」

ショウのバカでかい声で我に返った。街中でいきなり叫び出すものだから周囲の人がビックリしてショウを見ている。

「クウト！待ち合わせ場所まで走ろうぜ！」

さらにこんなことを言い出す。

（嘘だろ・・・？）

無論クウトはそんなことは絶対にしない。
カラクサタウンの大会は意外と歴史が古く、この地方では有名な大会らしい。
なので、準優勝したクウトにもインタビューやら何やらがたくさん来た。夏休みの宿題より多く感じるほどに。そのせいでバトルの疲れと重なってクウトは非常に疲れているのだ。

本当は寮で寝たいのだが卒業前なのでクラスのお別れ会がこの後あるのだ。さすがにそれをサボるわけにはいかないのでクウト達は今こうして会場に向かっているのだ。
ちなみに、場所はレストランを貸し切ってやるらしく費用は全てクウトのクラスの担任持ちだ。
・・・先生かなりの太っ腹である。

「よし、行こうぜ！」

「待て！本当にやる気か！」

「やんないのか？」

意外そうな顔でクウトを見るショウ。

「こんな街中で人のたくさんいる道路でやる気？他の人に迷惑だし、何より恥ずかしいから」

と、いうか自分よりインタビューや取材が確実に多かったショウが何故こんなに元気なのかクウトには謎だ。

「で、場所はどこだ？」

「・・・は？」

（今、なんて言った？）

「ゴメンショウ。聞き間違いかもしれないからもう一度言って」

「場所はどこだ？」

呆れた。ショウに振り回されることになれているクウトもさすがにこれには呆れた。

（ていうか場所も分からず競争しようって・・・）

「あのさ、ショウ」

「何だ？」

「・・・やっぱいいや」

クウトは言おうとした言葉を飲み込んだ。今更だ。

「お前今バカにしただろ！」

後ろで騒いでるショウを放置してクウトはどんどん歩いて行く。

「無視すんなぁぁ！」

「周り（と僕に）に迷惑。うるさいから黙ってて」

振り向きざまにクウトのいろいろな思いがこもった拳が、クウトに向かって走って来たショウの鳩尾（みぞおち）に決まった。

その後、道の真ん中で倒れている大会優勝者がいたとかいないとか。

「で、こいつを放置してたのを忘れてて回収しに行ってたから遅れた。ということかな？」

「はい、すいません先生」

クウトは目の前の青年に素直に謝った。

「クウト怒られてやんの～」

どっかからかう声が聞こえてきたがクウトは無視した。その様子を青年は笑ってみていた。

先生と呼ばれたこの青年の名前はヒロといい、２年目の新人教師でクウトとショウのクラスの担任の先生だ。

歳は２０くらいで、整った顔立ちと、この地方では珍しい黒い色をした髪と目が特長だ。２年目ながら教師として人気があり、今年の始業式ではほぼ全ての生徒がこの先生が良いと思ったほどだ。

またバトルの実力も高く、クウトとショウが２人がかりで挑んでも未だに勝てたことはない。噂ではポケモンリーグで準優勝した経験もあるらしい。

「それよりお金大丈夫なの？」

レストランを丸々一個借り切るなんてよっぽどお金が無いとできないことだ。

「ああ、全然大丈夫だよ。あと3回は行けるかな？」

「それ、相当あるんじゃ・・・」

そう言ったクウトの目にレストランのあちこちではしゃいでいるクラスメートの姿が映った。

卒業すると旅に出るか、上の階級の中等学校に進学するかを迫られる。このクラスでは約半分が旅に出て、残りは中等学校に進学する予定だ。

卒業後はそう簡単に会えなくなるので今日はその分はしゃごうということだろうか。

「そういえばクウトは進路決めたの？君だけまだ聞いてないんだけど」

ヒロが思い出したように言った。

「・・・・」

その問いに対しクウトは答えない。答えられない。そんなクウトの様子を見てヒロは苦笑いをしながら言った。

「前から言ってる通り、別に今すぐに答えを出せとは言ってない。まだ二週間は考える時間がある。それまでに決めればいい」

小等学校を卒業しても最終的な決定はその二週間後に決めることになっている。その間に進路を変える生徒も毎年少なからずいる。時間はまだあるのだ。

真顔になってヒロは言った。

「だから進路は自分で決めなよ。最終的に決めるのはクウト自分だから。それに他人に流される人生なんて面白くないしね」

「・・・・・」

それでもクウトの表情はまだ晴れない。

「あーもう！考えるのはやめやめ！そんな焦っても答えなんかでないって！しけた顔してないでクラスのみんなの所へ行っておいで！ショウ、クウトをみんなの所まで連行して！」

「ラジャ！隊長！」

「え？ショウ！何すんだ！」

いつのまにかクウトの背後に来ていたショウがクウトの首に手を回しそのまま引きずっていく。

「首絞まる首絞まる！」

クウトの悲鳴が響いた。

「でも、どこに進もうが理不尽なことは必ずあって力がなければそれに対抗できない。それが現実だ」

ヒロの言葉は誰にも聞こえず、空間に溶けていった。

第七話　定まらぬ道〔マヨイ〕（後書き）

この世界の学習制度について。

トレーナーズスクール（十歳未満の子供が通う塾みたいな者）

←

小等学校（十歳で入学。以後２年間在籍。義務教育）

←

←（卒業後、旅に出るか中等学校に進学するか選ぶ）

←

中等学校（３年間在籍）

ｏｒ

旅（小等学校を卒業していたら誰でも出れる。中等学校を中退して旅に出るのも可）

←

高等学校（５年間在籍）

←

←（医療など専門知識のいる職業へ就職する場合、専門学校へ進学する必要あり。　←これにはジムリーダーなどは含まない）

←

専門学校（２年間在籍）

仕組みはだいたいこんな感じです。

第八話　闇夜の中で【ミッダン】

クウト達のパーティーも終わり、寮でぐっすり眠っている頃。
バトル大会の熱気も静まり、暗闇に覆われた街の路地裏に一人の男がいた。服装は上から下まで全て真っ黒で、頭に黒いフードまで被っており光の少ない路地裏では目をこらさないと気づかないほどに目立たない。
何故このような格好をしているのか。それは、男は目立つわけにはいかないからだ。

「着いたか・・」

男が小さく呟いた。その声に合わせるかのように星の瞬く空から同じ格好をした人影が落ちてきて、男の隣にストンと着地した。正確にはポケモンから降りてきたのだ。
男達の上空には大きな鳥が飛んでいる。

「言われた通り任務の再確認してきましたよ。ついでにそいつの情報も聞いてきました。師匠の言うとおり将来有望らしいですね。仲間に欲しいくらいだって言ってました」

乗ってきたポケモンをボールにしまいながら降りてきた人影は言った。その声はよく通るソプラノボイス。フードの下から男を覗く顔はクウトと年齢のほとんどかわらない少女だった。
それに対し、師匠と呼ばれた男は「そうか」とだけ言い、目を閉じて黙り込んでしまった。辺りには沈黙がおりた。

（うわ、気まずっ）

自らの師匠とも呼ぶべきこの人が口数が多くないことを少女は知っているのだが、もう少し口数を増やして欲しい。そう彼女は思ったが、それを言っても直らない人なのでしかたない。彼女はそう割り切ってこのことについて考えるのをやめた。
特にやることもないので頭上の夜空を見上げる。深夜なので明かりがほとんど消えており、散りばめられた星がよく見えた。
その星を少女はボー、と見つめる。その目はどこか遠くを見ているようなそんな目だった。

「ところでお前、昼は何をしていた」

唐突に口を開いた師匠の声に我に返り、少女は師匠に目線を戻した。

「え？普通に移動中でしたけど？」

「そうか。じゃあこれはどういうことだ？」

男はポケットから一枚の写真を取り出す。それを見た瞬間、少女の顔が引きつった。

「何てことはない。これは今日の大会に出てたランという奴の写真なんだが、これはお前だな。口調や髪型を変えていたが残念ながら俺にはバレバレだ。任務の集合に自分だけ遅れて、大会に出て楽しむなんていい身分だな」

師匠に全てバレてる事を悟った少女が取った手段は・・・。

「この人の調査任務が出てたじゃないですか！いっぺんに済ませた方が良いかなって思ったんですよ！それに挑発とかしていろいろ

頑張ったんですよ！」

咄嗟に思いついた言い訳だった。だが、師匠には通用しなかった。

「声が裏返ってるのに信用できるわけないな。そもそもそれは俺たちに出た任務ではない。

・・・戦いたかっただけだろ」

「あうぅ・・・」

言い訳を冷静に返され師匠を言いくるめる方法が無くなったと判断した少女の取った行動。それは戦略的な一時撤退。要するに逃走だった。

が、それも師匠にはバレてたらしく、肩をがっちり掴まれた。

「ほう・・・。俺から逃げようとは良い度胸だな」

「同情酌量（どうじょうしゃくりょう）の余地は」

「無い。さあ、お説教だ」

師匠は少女をどこかへ引きずっていった。

結局師匠の説教は朝まで続き、少女は翌日、睡眠不足に悩まされたとさ。

第八話　闇夜の中で【ミツダン】（後書き）

クウト&ショウ

「僕（俺）たちの出番は？」←指をボキボキ鳴らしながら

次にはあるから！！だから待て！二人とも！

第九話　羽ばたけ〔ヒショウスルモノ〕（前書き）

ショウ
「さて・・・。」

クウト
「一ヶ月近く遅れた理由を説明してもらおうか」

えーと、今回は言い訳できません。ハイ。
テスト終わってずっとゲームしてました↑頭を下げる

クウト
「それじゃ・・・」↑モンスターボールを構える

ショウ
「覚悟はできてるよな?」↑クウトと同じく

ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!

その後、彼の行方を知るものはいなかった・・・

第九話　羽ばたけ〔ヒショウスルモノ〕

「旅に出ます」

廊下でクウトに会うなりいきなり言われた。
確かに昨日早く答えを出せと言ったが翌日の朝、しかも廊下でのすれ違いざまに言われるとは思ってなかった。
ヒロは面食らって固まってしまう。

「わかった」

数秒経ってヒロの口から出た言葉。それは肯定だった。
昨日はああ言ったがあれは教師という立場上言っておかなければならなかっただけだ。
教育で明確（なんとなく）な理由無くは許されない。
なんとなく選んだ進路が生徒にまったく合わず、人生を棒に振ってしまう可能性があるからだ。
そして、そうなった生徒は後で後悔するのだ。
あの時ちゃんと進路を選んでおけば良かったと。もっと自分にあった進路を選んでおけば良かったと。
その例は今までにも沢山ある。
そう言う生徒を作らないために教師間では明確な理由無く進路を選ぶことはあまり良い教育とはいえない、というのが一般的な考えだ。
理由が必要なのもちゃんと生徒のことを考えてのことなのだ。
だが、ヒロはときどき思う。理由で縛って生徒が本当にやりたいことができてないのではないかと。
確かに他の教師の言う通り理由とは大事だ。特に、進路期においては選択の指針ともなりえる。

だが、それだと理由がないと行動できない。そんな生徒が生まれないだろうか？
ヒロは教師になった時からそれを危惧していた。
だから、他の教師に異端の目で見られても理由で縛りはしなかった。
それに・・・
ホームルームのチャイムが鳴り、教室のドアを開けるとクラスの生徒全員の視線がヒロに集まるのを感じた。
全員がその目にヒロには無い力を宿している。
この目を、生徒達を理由という鳥かごで縛って飛べずに一生を過ごして欲しくない。
だから、生徒達には自由に羽ばたいて欲しい。
・・・鳥かごに閉じ込められ、羽ばたけなかった愚かな鳥の分も。

卒業式では泣かない。そう決めていた。
成長する過程でだれもが経験することだ。これからこういう事が沢山あるのにいちいち泣いてなんかいられない。そう思っていた。
でも今日考え方が変わった。
人の命は有限だ。
その中で僕たちが一緒のクラスにいた時間はそれのほんの一瞬なのだろう。
だけど、その一瞬の思い出を大切にし、別れを惜しみ、その一瞬のために涙を流す。
そんなのもありかなってみんなが泣く中で思った。
僕は今日初めて涙を流した。

卒業式の終了後、クウトとショウは街の南西に位置する公園のベンチに腰掛けていた。手には卒業証書の入った丸い筒が握られている。

３００平方メートルほどの面積の公園は普段は遊ぶ子供達でいっぱいだが、なぜか今はその２人だけしかいない。

空を見上げると一面の青空。透き通るように青い。だが、雲一つ無いその空は、今は何故か寂しく感じた。

「青いなぁ・・・」

「お前ってたまにおっさん臭いこと言うよな」

隣に座っているショウの言葉が刺さる。だが、同時に納得もしてしまう。

空を見て黄昏れるなんて小等学校を卒業したばかりの生徒がすることではない。

（だからっておっさん臭いはないだろ！大人びてるとか言い方を変えてくれ！）

思ったことを口にすることは親友の良いところであり悪いところでもある。

だからといっておっさん臭いは心外だ。

「そうだ。そういや聞きたかったんだが何で旅にしたんだ？あんな迷ってたのに」

そんなことを気にした様子もなく、思い出したように聞いてきた。

（あ～。まだ言ってなかったっけ）

そんな立派な理由ではない。そもそも理由とも言えるかどうか怪しい。

「聞きたいんだったら話すよ」

その口から話されるのは、大人びた少年の子供のような理由（こたえ）だった。

第九話　羽ばたけ（ヒショウスルモノ）（後書き）

し、死ぬかと思った・・・。

クウト

「次からはもっと早く」

ハ、ハイ・・・。

（次の話にまだ手もつけてないなんて絶対言えない・・・）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7385w/

ポケットモンスター白と黒の竜

2011年12月24日04時02分発行